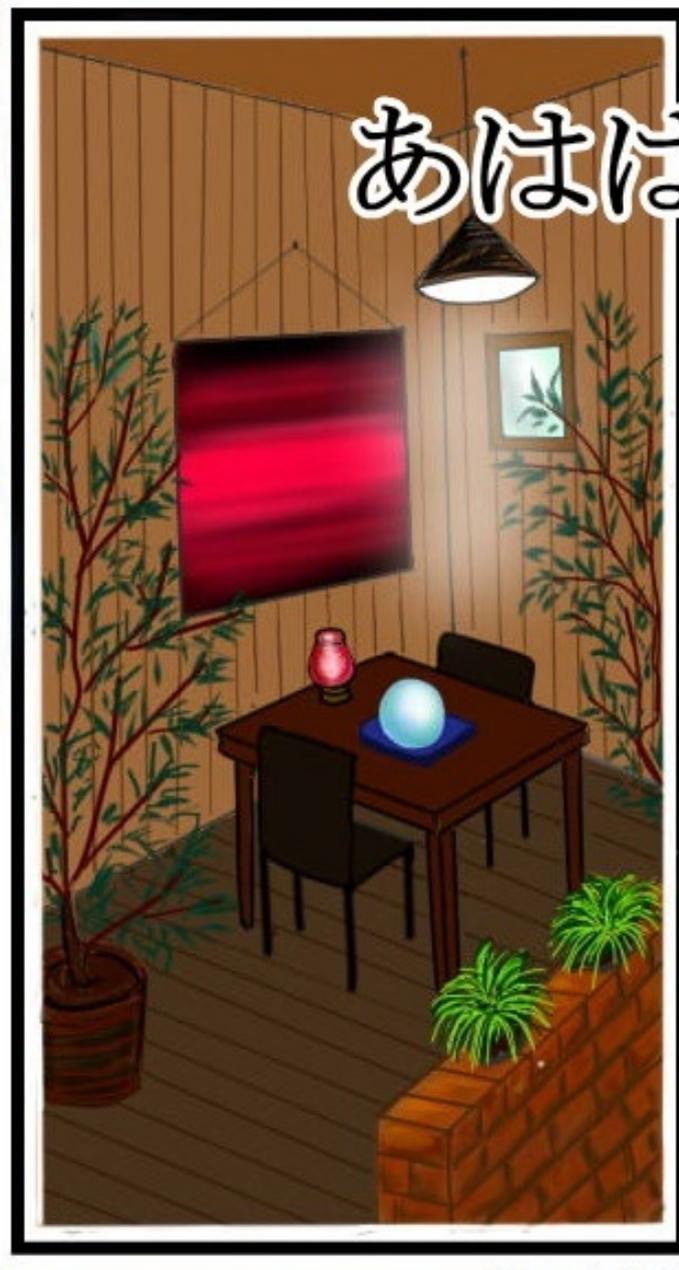
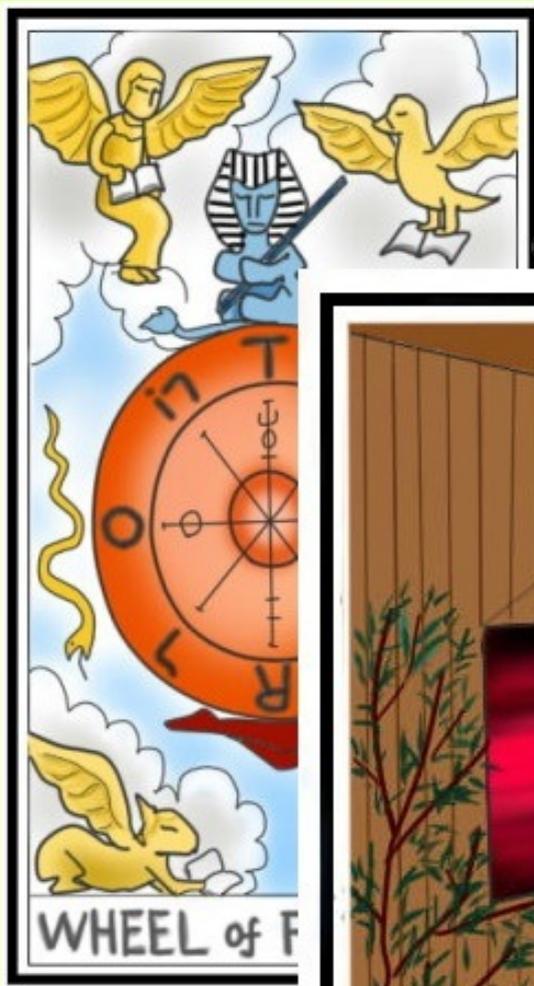


占い、カフェの

片隅で

あはは☆るい



4

予兆（1）

真美が恐れていたことが起こり始めていた。

『カアちゃん喫茶店をめぐる』というブログを見た、というお客が、わずかな人数ではあるが、テンペストを訪れるようになったのだ。

「霊視してもらえると聞いて来ました」

「占いは予約制ですか？」

そう聞かれる度に、真美はこう答えた。

「申し訳ありませんが、当店では占いも霊視もやっておりません」

真美が断わっても、諦めずに何度も来店するお客もいた。

「ブログの管理人さんにメールで確かめたら、靈感がある店員さんがいると言っていました」それでも真美は否定した。

「あなたが靈感のある店員さんでしょ？カアちゃんが言うには、あ、カアちゃんていうのはブログの管理人さんなんだけど、靈感のある店員さんは、占いをお願いしても、絶対に断ると思うから、粘り強くお店に通ってお願いしなさいってアドバイスしてくれました」

真美は心の中で舌打ちした。

余計なことをしてくれる。美穂も、美穂の従妹も。

「宣伝もしてないのに、真美の霊的パワーはすごいね」

友里がのんびりした口調で言った。

「友里のせいよ！」

真美がヒステリックに叫んだ。

「あら、私のせい？元はと言えば、真美が『危ない』なんて予言めいたことを言ったからでしょ？」

そう言われると、真美は返す言葉がなかった。

美穂の従妹がブログに書いたりしなければ...

「噂なんて、どこからでも広まるものよ。真美の靈感は本物なんだから」

「靈感なんてないって言ってるでしょ！」

「ムキにならなくてもいいじゃない？」

のんびりした友里の口調が、いっそう真美をイライラさせた。

「真美は靈感があるのが嫌なの？私ほうやましいけどなあ」

「いい加減にして！しつこい！」

友里はそれ以上、何も言わなかった。

予兆（2）

もしかしたら、真美の靈感は本物かもしれない。

でもそれは、自分でコントロールできるほど完成された能力ではなかった。

友里は「修行したらどうかしら？」と呑気なことを言うが、

真美は霊能力を高めようとは思わなかった。占いを勉強して極めるつもりもなかった

真美は占いを断り続けたが、占いを目当てに来店するお客は日に日に増えた。

『500円で占ってもらえるらしい』という噂も流れていた。

友里の知り合いの男が、軽い気持ちで女子高生を占ったせいだ。

「店で占いをやりたかったら、あの男に頼めばいいじゃない！」

真美の怒りは友里に向かった。

「だから前にも言ったでしょ？あの人は占いでは・・・」

「それなら別の占い師を頼めば！」

友里の言葉をさえぎって、真美はきつい口調で言った。

「占い師の知り合いはたくさんいるでしょ！」

「そんなに怒らないでよ。占いを無理強いするつもりはないから」

「友里はそのつもりでも、お客様は納得しないよ」

「大丈夫。占いをしないからって怒りだすお客はいないわ」

しかし、友里の考えは甘かった。

「このお店には靈感のある人がいるそうね？」

そのお客は1人で来店した。

怒ったような話し方をする女だった。

「占いをしてくれるそうだけど、今からお願いできるかしら？」

畳み掛けるように女は喋った。

「申し訳ございませんが、何か勘違いなさっているようです。

当店では占いはやっておりません」

真美がいつものように答えると、女は意地悪そうに言った。

「靈感がある店員というのは、あなたね？なぜ隠すの？バカじゃないの？」

真美はムツとした。

占ってほしいと言う割には、女の態度は挑発的だった。

予兆（3）

「靈感のある店員が不親切だという噂は本当なのね」

「誰が噂しているのですか？」

真美は冷静に聞いた。

「そんなこと知らない。噂っていうのはね、何気なく広まるものよ」

女は何を話しても喧嘩腰だ。

余計なことは話さないほうがよさそうだった。

真美が黙っていると、女は勝ち誇った顔をした。

「靈感があるんでしょ？占いをしなさいよ。いくらなら占ってくれる？」

「お客様、申し訳ございませんが、当店では本当に占いはしておりません」

「お客を選ぶつもりね。常連客しかダメってこと？」

女はしつこかった。

「お客様、申し訳ございませんが、先にご注文をお伺いしてもよろしいですか？」

「あなた、客の話を無視するつもり！？」

女はテーブルを両手で叩いた。

その勢いでコップは倒れ、テーブルから水が滴り落ちた。

「お客様、大丈夫ですか？」

持っていた布巾で、真美がこぼれた水を拭いていると、女が立ち上がった。

「もういいわ！こんな店、2度とこないから」

真美を払いのけるようにして、女は店を出て行った。

真美はしゃがんだまま泣いていた。

友里が心配そうに近寄ってきた。

「ここは私がやるから。真美は裏で休んできて」

大丈夫と言おうとしたが、真美は声が出なかった。

友里は泣いている真美の背中を優しくさすった。

泣いては仕事にならない。真美はゆっくり立ち上がると休憩室に向かった。

どうしてこんな事を言われなくてはいけないんだろう？

美穂が現れるとろくなことがない。

高校でも、大学でも、美穂のせいで占いをするはめになった。

カフェの仕事にも、やっと慣れてきたのに、美穂のせいで嫌な目に遭う。

美穂なんか、シンガポールで一生暮らせばいい。

真美の思いが通じたのか、美穂はなかなか現れなかった。

真実（1）

占い目当てでテンペストを訪れるお客が後を絶たなかった。

真美はお店に向かう足取りが重くなるのを感じていた。

朝目覚めた瞬間から気持ちが憂うつだった。月曜の朝だけでなく、毎日が憂うつだった。

友里は「真美が気乗りしないのなら、占いはしなくていい」と言ってくれたが、

カフェの片隅のテーブルを片付けようとはしなかった。

『お店を辞めようかな...』

真美はそう考えるようになっていた。

でも、この仕事を辞めたら生活できない。

後先を考えずに辞めるほど、真美は若くなかった。

昼下がりに、お店の表のゴミを拾いながら、

ふと街路樹に目をやると、葉っぱが赤や黄色に色づいていた。

ひらひらと枯葉が舞う中、誰かが真美に手を振っている。

大和美穂だ。

「やっほ〜」

美穂は右手をブンブン振りながら近づいてきた。

「真美、おひさ〜。しけた顔してどうした？」

「いつシンガポールから帰ってきたの？」

「私がシンガポールへ行ってたこと、真美は知ってたんだ」

「美穂の従妹が教えてくれたわ」

「あいつー、何でも喋るんだから。ま、いいけど」

「何しに行ったの？」

「新婚旅行よ〜。な〜んてね」

「もしかして、クリリンに会いに行ったの？」

「鋭いなあ。ズバリそのとおり！」

「クリリンに会えた？」

「会えなかった。会えると思ったんだけどね。」

クリリンは休暇中だった。信じてないでしょ？ホントよ」

「なぜクリリンに会おうと思ったの？」

「真美がクリリンのことを知りたがってたから！」

真実（2）

真美と美穂が外で立ち話をしていると、友里が顔を出した。

「いらっしゃいませ。真美、中に入っていたら？」

「でも...」

真美は美穂の顔を見た。

「美穂はどこかへ行く途中じゃないの？」

「え？私は真美に会いに来たのよ」

「どうぞ中へ」

あまり嬉しそうでない真美に代わって、友里が営業スマイルでドアを開けた。

「真美の分のコーヒーも入れたから、ゆっくり話してきたら？」

友里にそう言われても、真美は気乗りしなかった。

美穂とじっくり話すと、よからぬことが起こりそうな気がした。

「さあ、早く運んで。お客様のコーヒーが冷めちゃう」

真美は仕方なくコーヒーを2人分運んで、美穂の前に座った。

「ふは～、うまいな、ここのコーヒーは」

美穂は一口飲むたびに「ふは～」と言った。

「シンガポールはどうだった？」

「良かったよ。海外に行くとは解放感があるからいいわ」

「そんなに何度も海外へ行ってるの？」

「2度目。前回は今回もシンガポール」

「ひとりで行ったの？」

「ううん、友達と2人で。専門学校の時のね」

「卒業旅行に一緒に行った人？」

「そうよ」

「そのお友達もクリリンのことを知ってるの？」

「ずっと前に話したかもしれない。もう忘れてると思うけど」

「お友達はクリリンのことを知らないのに、美穂はクリリンに会うつもりだったの？」

「アイタタタ。痛いところを突かれたわ。」

実は旅行社に勤めている知り合いに話したら、クリリンの連絡先を調べてくれて、

シンガポールに行く前に、旅行社を通じて連絡を取ってもらったの。

そしたらただ今休暇中～てことでした」

「なんだ、そういうことか。クリリンは美穂と会いたくなかったのかもね」

「そうかもしれない。私もそれほど会いたくなかったから、まあいいけど」

美穂はコーヒーを飲み終わると、お冷も全部飲み干した。

真実（3）

「クリリンは今もシンガポールにいるのかな？」

「いると思うよ。クリリンさ、向こうで結婚したんだよ」

「外国人と？」

「ううん、日本人と」

「子どもは？」

「子どもはいないと言ってた。でも、あれから何年も経つからなあ」

「よくそんなに詳しく話が聞けたね」

「言われてみればそうかも」

「クリリンはどうして学校を辞めたの？」

「そこよ、皆が聞いたかったのは。ちゃんと聞いたわ」

美穂の話によると、クリリンはそれほど教師になりたいと思っていなかったようだ。

得意の英語を生かしたいとは思っていたが、英語の先生ではなく、他の職業に就きたいと思っていた。

でも、親に強く勧められて教師になった。

しかし、教師になって10年が過ぎたころから、

親のいいなりになった人生に疑問を持ち始めた。

そう思い始めると何もかもが嫌になってしまった。

「なんだか虚しくならない？」

クリリンはこんな仕事は嫌だと思いながら、毎日私たちに接していたのよ」

「そうね。美穂の気持ちも分かるわ。でも、私はクリリンの気持ちも分かる気がする。

心から自分の仕事が楽しいと言える人なんて、そんなにいないと思うわ」

美穂はコップの中の氷を口に入れて、ガリガリ噛んだ。

「気が付かなくてごめんね、コップが空ね」

真美がコップを持つとすると、美穂が止めた。

「お水はいいわ。話はここからが面白いのよ」

美穂は真美のほうへ顔をグイッと近づけた。

「人生に疑問を持ち始めたクリリンは、どこへ行ったと思う？」

「分かんない。海外旅行？」

「ブブー」

「彼のところ？」

「ブブー」

美穂はニマツと笑った。

真実（４）

「さすがの真美も分からないみたいね？」

「ぜんぜん分かんない」

「ヒントをあげようか？」

「ヒントはいらないから、早く正解を教えて」

「じゃあ言うわ。クリリンが行ったのはね・・・」

美穂はそこまで言うと口をつぐんだ。

「早く教えてよ」

「どうしようかなあ。真美はきっと『ウソ！？信じられない』と言うと思うな」

「言わないから早く教えて」

「じゃあ教えてあげる。クリリンが向かった先は、なんと！」

美穂はテーブルを右手でポンッと叩いた。

「占い師のところよ」

「ウソ！？」

「ホント」

「占い師と学校を辞めたのと、どういう関係があるの？」

「クリリンは人生に迷っている時、占い師にこう言われた。

『あなたは海外へ行くと運が開けます』ってね」

「そんなことぐらいで学校を辞めてシンガポールへ？信じられない」

「迷える者は藁をもつかむ、よ」

「それを言うなら、溺れる者は...じゃないの？」

「そうとも言う」

「それはどこの占い師？」

「真美も気になる？」

「いやそれほどは...」

「気になるくせに。実はこの間、私はその占い師を訪ねてみたの」

「マジで！？」

「私さ、こう見えて、旅先では些細なこともメモして帰るの。当時のメモ帳を開いたら、『クリリン 占い師 電車で1時間 駅の近くのビルの一角 狭い場所』で書いてあった」

「それだけでよく行けたわね」

「ネットで一生懸命調べた。人にも聞いたりしてね。

私は執念で見つけた。クリリンをシンガポールへ導いた占い師をね」

真実（5）

「でも、美穂が会った占い師が、クリリンを占った人とは限らないでしょ？」

「いい質問ね。私は占い師にこう質問した」

美穂は少し悲しげな顔をして、芝居じみた口調で話し始めた。

「私は今の仕事を辞めようかと迷っています。もっと得意の英語を生かした仕事がしたい。

仕事上での人間関係もうまくいかず困っています」

美穂は持っていたハンカチを目に当てて、泣くふりをした。

真美は吹き出しそうになったが、ぐっところえた。

「私の問いに、占い師は真面目な顔でこう答えた」

『あなたは海外へ行くと運が開けます』

「えー！！！」

真美は自分でも驚くほど大きな声を出していた。

隣の席のお客が何事かと真美のほうを見た。

「ね、ビックリでしょ？クリリンが言われたのと全く同じ。嘘みたいだけど本当の話。きっとその占い師は、何パターンか答えを用意しているんだと思う」

「クリリンは素直に占い師のお言葉に従ったわけだ」

美穂は、お祓いをするように手を振り、「信じる者こそ救われるう」と言った。

「鑑定料は約10分で3000円だった」

「へ～、3000円か。クリリンの人生は3000円で大きく変わったんだ」

「そうかな？クリリンは占い師に出会わなくても、同じ人生を歩んだかもしれないよ。従妹から聞いたけど、真美のところにも、占ってもらいたい人が毎日来るんでしょ？

占ってあげなよ。真美と話ができるだけで、満足するんだからさ」

真美はこれ以上、美穂と占いの話をしたくなかった。

「ところで美穂はどうして会社を辞めたの？」

真美は話題を変えた。

「あいつ、私が会社辞めた話までしたの？まったくお喋りなんだから」

「美穂も海外へ行ったら運が開けるかもよ」

「占い師に3000円支払ったことだしね。アハハハ」美穂は大きな声で笑った。

悪い予感（1）

美穂は笑い過ぎて咳き込んだ。

「お冷のおかわり入れてくるね。私、そろそろ仕事に戻るわ」

「それならコーヒーをもう一杯お願い。それと、トーストもね」

「バターでいいかな？」

「バターを塗った上にイチゴジャムをお願いできる？」

「かしこまりました」

真美はわざと丁寧な口調で答えた。

美穂はバタージャムトーストを食べ終わると、

雑誌を何冊かテーブルの上に並べて、小一時間ほど熱心に読んでいたが、

真美が忙しそうにしていたせいか、「ごちそうさま」とだけ言って帰った。

美穂が来店した翌日に、美穂の従妹からテンペストに電話が入った。

電話を受けたのは友里だ。

「12人分の席を予約したいそうよ。お名前は村田明美様」

友里は分厚めの紙に『予約席 村田様』と書き、テーブルの上に置けるように紙を三角に折った。△

美穂の従妹が『村田明美』という名であることを、真美は初めて知った。

友里は名字だけ聞くつもりで「お名前を伺ってもよろしいですか？」と尋ねたらしいが、

「名字は村田、下の名前は明るくて美しい明美ちゃんです、って教えてくれたの」と笑った。

ランチタイムは村田様御一行がにぎやかに到着して、

店内はパーティーのような騒ぎになった。

「ブログで知り合った人たちのオフ会です」と明美は説明した。

明美のブログ『カアちゃん喫茶店をめぐる』は、真美も何度か読んだことがある。

ブログのアクセスカウンターを見ると、人気ブログというほどでもないが、

そこそこアクセスはあるようだった。

明美のブログはタイトルどおり、飲食店を巡った記事がほとんどだった。

しかし、真美の耳に飛び込んでくるのは、占いの話ばかりだった。

「東京の霊能者に鑑定してもらいました」

「京都の占い師に15分で6000円もふんだくられちゃった」

「大阪で前世鑑定をしてもらったけど、当たってるような気がしなかった」

「京都タワーでコンピューター手相占いをしてきました。まあまあ当たってるかも」

12人は4人ずつ3つのボックス席に座っていたが、それぞれ占い自慢？が展開されていた。

悪い予感（2）

明美はなぜ、テンペストをオフ会の場所を選んだのか？

真美はそのことが気になっていた。嫌な予感がした。

初めて明美がテンペストに訪れたとき、「車を30分も飛ばしてきたのに」と言った。

つまり、テンペストは明美の家からは少しばかり遠いはずだ。

それなのに、わざわざここでオフ会をするということは、何か目的があるはずだ。

ランチタイムは目が回るような忙しさだった。

友里は予約の12人が、日替わりランチを注文すると思い込んでいたが、

日替わりランチを注文したのは5人だけで、

あとの7人は見事なくらいバラバラの注文だった。

真美は注文をメモするだけでも大変だった。

「ピラフとぶどうスカッシュ」「たらこスパゲティとホット」「ホットサンドとコーラ」

「ミックスサンドとオレンジジュース」「ピザトーストとレスカ」

「カツカレーと、食後にアイスクリーム」「ナポリタンとアイ스티ー」

こんな日に限って、日替わりランチ目当てのお客も通常より多く来店した。

店内が満席なのを見て「日替わりランチをテイクアウトできないか？」と言い出すお客もいた。

驚くことに、友里はテイクアウト用の容器を準備していた。

こういう事態にも対応できるように、オープン前から考えていたようだ。

日替わりランチはあらかじめ多めに準備していたおかげで、

比較的スムーズに運ぶことが出来た。

しかし、それ以外のメニューを注文したオフ会のメンバーにしてみれば、

後から注文したお客に先に料理が運ばれることになり、不満の声が上がった。

こんな時、真美はすぐにあせってしまうが、友里は冷静だった。

「申し訳ございません。すぐにご用意いたしますので」

カウンターの中から、友里が明るい声で答えた。

友里は出来る限り急いで注文の料理を作った。

真美は飲み物を作ったり、フライパンを洗ったりしたが、

あせってフライパンを床に落としそうになったり、ホットコーヒーをグラスに入れそうになったりした。

悪い予感（3）

嵐のようにランチタイムが過ぎ去り、流しにはお皿やコップが山積みになった。

「真美の言うとおりに、食洗機を入れておけば良かった」と友里がぼやいた。

食器を片づけたり、テーブルの上を拭いたりしている間も、

明美のオフ会のメンバーからは、追加注文が入っていた。

「チョコレートパフェ」「イチゴクレープ」「コーヒーゼリー」「クリームソーダ」

「ホットおかわり」「ミックスジュース」「プリン」「アップルパイとレモンティ」・・・。

グループで来店して、これほどバラバラな注文が入るのも珍しかった。

普通は誰かが初めに注文すると、「私も」「それなら私も」と、同じ物を注文する人が多い。

明美のオフ会は、自己主張の強いメンバーがそろっているようだ。

オフ会が始まって2時間が過ぎたころ、明美の隣に座っていた女が真美を呼んだ。

「あなたが真美さんね？ちょっといいかしら？」

「はい、何でしょうか？」

「私たちが今日このお店に来たのは、あなたに占ってもらうためなの」

『やっぱり...』と真美は思った。

「全員を占ってとは言わないから安心して」明美が横から口を挟んだ。

「どう？お願いできるかしら？」

真美の嫌な予感は当たってしまった。友里はハラハラしながら見守っていた。

占いを断ったら、ただでは済まない雰囲気は漂っていた。

真美は美穂から言われた言葉を思い出していた。

『占ってあげなよ。真美と話ができるだけで、満足するんだからさ』

真美は意を決した。

「私には霊的能力などありません。占いに関しても素人です。それでもいいのですか？」

明美はスクッと立ち上がると、真美の肩に手を置いた。

「いいわよ、いいわよ！いいに決まってるじゃない！」

先ほどの女が「2～3名なら占ってもらえる？」と真美に聞いた。

真美が頷くと、女はオフ会のメンバーに「さあくじ引きをするわよ」と大きな声で言った。

始まり（１）

女はトートバックの中から、２０センチほどに切った白いヒモを人数分出した。

「今から私が３本のヒモの先端だけに赤い色を塗ります」

女は赤いマジックで、ヒモの先に素早く色を塗った。

「真美さん、皆に分からないようにヒモを混ぜてちょうだい。私がやるより公平でしょ？」

女は真美の返事を待たずに、ヒモを握らせた。

真美は仕方なく、赤いしるしが付いたヒモを白いヒモに混ぜた。

「ダメじゃない、皆にヒモを見せて混ぜたら意味がないでしょ？」

真美はため息をつきたい気分になったが、ぐっところえた。

オフ会のメンバーから少し離れた場所で背を向けて、真美はヒモを混ぜた。

「いいわ。赤いしるしが見えないように手で握ってこちらへ来て」

真美が言われたとおりにすると、順序よくオフ会のメンバーがくじを引いた。

くじを引く順番が、すでに決まっていたことに真美は驚いた。

「ここに来る前に、じゃんけんで決めたのよ」と明美が言った。

真美は明美が当たりくじを引きませんようにと祈った。

くじ引きを用意した女が最初にひいた。結果はハズレ。

真美は少しほっとした。

当たりを引いたのは、メンバーの中ではおとなしそうな女と、

カツカレーを注文した女と、明美だった。

「私って、くじ運があるのよね」

明美が自慢げに皆に言った。

「忘れていたけど、おいくらで占ってもらえるの？」と明美が聞いた。

真美が困って友里のほうを見ると、そっと手のひらを広げてみせた。

「５００円で」

「えー、５００円でいいの？」

皆が驚いた。

後で友里に聞くと、５００円ではなくて、５０００円のもりで手を広げたと言った。

「真美も少しはお小遣い稼ぎになると思ったのに、５００円で言うんだもの」

でも、５０００円も鑑定料を取るほど自信のなかった真美は、５００円が妥当だと思った。

もし真美の占いがハズレたとしても、５００円ならそれほど怒る人もいないだろう。

始まり（2）

「占う前にお願いしたいことがあります」

真美は恐る恐る切り出した。

「占いはお1人様1件で。時間は10分程度でお願いします。

店内が混んできた場合は、店長ひとりでは切り盛りできませんので、

占いを途中で切り上げることもあります。その場合、料金はお返しします」

先ほどヒモに色を塗った女は少し不服そうな顔をしたが、

「それでいいわよ、十分よ」と明美が言ってくれたおかげで、

「そうよね、無理言ったんだもの」と他のメンバーも納得してくれた。

明美は何かにつけて強引だが、美穂と同じでサッパリした性格だ。

「長い時間、居座ってごめんなさいね。何か追加注文するわね。さあさあ皆さんも！

手間のかかる注文はダメよ。ホット飲む人？オレンジジュースの人？」

明美の呼びかけに、「私ホット」「私も」「私はジュース」と、何人かが手を挙げた。

明美は気づいていたのだ。

オフ会のメンバーが、皆バラバラに手間のかかる注文をしていたことを。

意外と細かいところに気配りのできる人だ。

そういう性格だから、オフ会を仕切れるのかもしれない。

真美がコーヒーやジュースを運び終えるのを待って、占いが始まった。

くじ引きで選ばれた3人に、真美が声をかけた。

「おひとりずつお願いしますね」

「私は最後でいいわ」と明美が言った。

カツカレーを注文した女が「じゃあ私から」と立ち上がった。

「あちらの席へどうぞ」

カフェの片隅で真美を待っていたテーブル席。

友里が選んだ不思議な趣きのある椅子に、真美は初めて座った。

テーブルの上には、オープンの時からエジプトカードとパワーストーンが並べてあった。

真美はエジプトカードを手を取った。それ以外に占いの道具がなかったからだ。

「はい、鑑定料500円。ここに置いとくね」

「ありがとうございます。初めにお名前と年齢を伺ってもよろしいですか？」

「常田美月、34歳です」

始まり（3）

「みづきさんですか。いいお名前ですね」

「変わった名前でしょ？漢字で書くと『美しい月』と書いて美月です。

奥ゆかしそうな名前なのに、私、性格は男っぽくて・・・」

美月は少年のような雰囲気を持つ女性だった。年齢よりも若く見えた。

「今日は何を占いましょうか？」

「私、今の会社を辞めようかと思っているんです」

真美はドキッとした。

こんなに重要なことを、いきなり聞かれるとは思っていなかったからだ。

「上司とも合わないし、新入社員はトロくてイライラするし、
気の合う同僚は結婚退職したし、やる気がなくなってしまって」

「何かやりたいことでもあるのですか？」

「いいえ、これといって何も。ただ辞めたいだけです」

「それで何を占えばいいのですか？」

「辞めたほうがいいのか、辞めないほうがいいのか、ということです」

真美はエジプトカードを美月に渡した。

「カードをシャッフルして、3つの山に分けてください」

美月はやる気がなさそうにカードをシャッフルした。

「もう少し気持ちをカードに集中してください」

真美がそう言っても、美月の態度は変わらなかった。

この人のこういう態度が、上司から反感を買う原因になっているのかもしれない、と真美は思った。

「カードを3つに分けたら、1つ目の山を3つ目の山に重ねて、最後に真ん中の山に重ねてください」

美月のシャッフルしたカードは乱雑な3つの山になった。

それらを1つの束にまとめるときも、美月はふてくされたような態度に見えた。

エジプトカードによる占いは、真美の知る限りは2種類ある。

ホロスコープ法と星型展開法だ。

真美は簡単に占える星型展開法を選んだ。個人的なことを占うには星型展開法が良い。

カードを使う場合、占ってもらう人がカードに思いを込めないと、

カードの答えもあいまいになってしまう可能性が高いが、

それでも真美は、出来る限り心を込めてアドバイスするつもりでいた。

始まり（４）

星型展開法の５枚のカードは、それぞれに意味がある。

- １．問題の本質
- ２．問題の原因
- ３．考えるべき要因
- ４．アドバイス
- ５．最終的な結果

たった５枚のカードで占えるのが、星形展開法の良いところでもある。

「どうですか？会社を辞めたほうがいいですか？」

「私は気持ちを集中してカードをシャッフルしてくださいとお願いしましたが、あなたは適当にカードをシャッフルしましたね？」

美月は黙っていた。

「カードは扱う人の気持ちを正直に表します。

カードにも気持ちがあります。雑に扱えば、正しい答えを出してくれないかもしれません」

「それならもう１度やらせて。カードの扱いに慣れてなかっただけ。今度はうまくやれるわ」

「それはできません。１つの質問に対して、何度もカードに答えを求めてはいけないのです」

「私にどうしろって言うの？それならさっさと占ってよ」

「ではカードをめくってみましょう。カードが正しい答えを導き出してくれますように」

美月は背筋を伸ばして神妙な顔をした。

「はっきり申し上げて、あなたは会社を辞めるべきではありません。あなたの心に迷いがあります」

「迷いがなかったら占ってもらわないでしょ？どうしたらいいのか、それを教えて」

「会社を辞めるかどうかは、もう少しじっくり考えたほうがいいと思います。

となると、会社でもっと心地よく過ごすには、どうしたらいいのか？ということになりますが。あなたは会社においても、日常生活においても、物事を大ざっぱに進める傾向がありますね？」

「そんなことないです。何事も気持ちを込めて、几帳面にやっています」

美月は否定したが、美月の服装を見ても、几帳面な性格とは思えなかった。

オフ会のメンバーは、それなりにオシャレしているのに、美月は犬の散歩にでも行くような服装だった。

「性格はそう簡単には変わりませんが、見た目は変えることができます」

「私にどうしろって言うの？」

美月は真美の言葉が癪に障ったが、反面、心の片隅では「そうかもしれない」と思った。

始まり（5）

「あなたはスタイルがいい。何を着ても似合うはずです。
時には普段と全く違う装いにチャレンジしてみたいはいかがでしょう？
そうすることによって、周囲の見る目が変わることもあります。
あなたは顔立ちも綺麗です。少しお化粧してみたいはいかがですか？」
美月はリップクリームさえ塗っていなかった。髪は後ろで無造作に結んでいた。
「女性はお化粧すると運気が上がるがあります。
あなたのように顔立ちが綺麗な方は、お化粧すると見違えるように華やかな雰囲気になります。
そうすることによって、人生も華やかになると思いますよ」
スタイルがいい、顔立ちが綺麗、と言われた美月は、まんざらでもなさそうだった。
「でも、私なんかお化粧したら、皆に気持ち悪いって言われそう」
「あなたがそう思っているだけで、皆はそうは思っていない」
「カードにそう出ていたの？」
真美はカードから答えを導き出したわけではない。
しかし、ここはカードから答えが出たように話したほうが良さそうだった。

「このカードを見てください。ハトホルという女神のカードです。
正位置ですから、女らしさを表しています。また信頼という意味もあります。
服装やメイクを女っぽく変えることで運気が上がり、周囲からの信頼も得ることが出来るでしょう」
美月はハトホルのカードを黙ってしばらく見つめていたが、
「分かりました。少し考えてみます」と静かに言った。美月は思いのほか素直だった。
「時間がきましたので、これで終わります」
10分で時間を切っておいて良かったと真美は思った。
真美の初めての占いはこうして終了した。

まだこの後2人占うことになっているが、真美は早くも疲れていた。
ランチタイムが嵐のように忙しかったせいもあるかもしれない。
500円でこんなに疲れては割に合わないと思った。
友里は心配そうに真美を見守っていた。
これまで何度となく、カフェで占いをしてほしいと頼んだ友里だったが、
真美の疲れた表情を見ていると、申し訳なく思った。

始まり（6）

2人目はオフ会のメンバーの中では、目立たない女だった。

「さああなたの番よ、早く」と皆に言われて、おずおずと席から立ち上がり、真美のほうへゆっくり歩いてきた。

「中畑優樹菜と申します。よろしくお願いします」

そう言いながら丁寧に頭を下げて、優樹菜は椅子に座った。

そして、手に握りしめていた500円玉をテーブルに置いた。

淡いピンクのカーディガンが良く似合っていた。うっすらメイクした目元が愛らしかった。

他のメンバーより若く見えた。20代後半だろうか？

「今日は何を占いましょうか？」

「今年の夏ぐらいから、夜になると頭が痛くなったり、胸が苦しくなったりします。病院で検査も受けましたが、どこも悪くないと言われました」

「それは心配ですね」

「違う病院に行ったほうがいいでしょうか？」

「では、生年月日を教えていただけま...」

そう言いかけて、優樹菜の顔を見た真美はギョツとした。

優樹菜の首に蛇が巻き付いていたのだ。

目の錯覚か？と思い、ゆっくり目を閉じてから、もう1度よく見ると、

蛇は見え、そのかわり、首の周りに黒くもやもやした雲のようなものが見えた。

そういうものが見える自分に真美は驚いていた。

しかし次の瞬間、真美はもっと驚くことになる。

「捨てられた。悲しい」

真美は突拍子もないことを口走っていた。また口が勝手に動いてしまったのだ。

優樹菜はハッとした顔をしていた。

「何か心当たりがありますか？」

これまで真美は、口が勝手に動いた時には、あわててごまかしていたが、

優樹菜の様子を見て、このまま話を進めようと思った。

「差し支えなければ話していただけますか？」

「私・・・」

優樹菜は言葉に詰まった。

「言いたくないことは話さなくても大丈夫ですよ」

真美が優しく声をかけると、優樹菜の緊張は少しとけたようだった。

始まり（7）

「ここで話したことは内緒にしてくれますか？」

「もちろんです」

「他の人に聞こえないかしら？」

「BGMも流れていますから、大きな声で話さなければ大丈夫ですよ」

優樹菜はオフ会のメンバーのほうをチラリと見た。

真美と優樹菜を気にしている者はいなかった。

「実は私、半年ほど前まで、女の人とつき合っていたんです。友達ではなく恋愛です」

「そうですか・・・」

真美は驚いたが、冷静なふりをした。

優樹菜はおとなしそうに見えるが、意外と大胆なのかもしれない。

「女が女とそういう関係になるなんて異常だと思うでしょ？」

でも好きだったんです、友達以上に」

「その人とは別れた、ということですか？」

「はい。私から別れようと言いました」

「別れる際に、トラブルはありませんでしたか？」

「彼女は私のことを恨んでやると言いました。でも私は、終わりにしようと言いました」

優樹菜の首に巻き付いていた蛇は、捨てられた女の生霊かもしれない。

以前テレビで、霊能者がそのような話をしていたことを、真美は思い出していた。

「もしかしたら、私の体調が悪いのは、彼女のせいでしょうか？」

真美はその問いには答えず、優樹菜にエジプトカードを渡した。

優樹菜は美月とは違い、真剣にカードをシャッフルした。

優樹菜が1つに束ねたカードを、真美が1枚1枚めくってゆく。

5枚のカードを星型に並べ終わると、今度は真美が言葉に詰まった。

問題の原因のカードは逆位置だったが、その他のカードは美しかった。

真美はそれほどカードの意味を熟知しているとは言えなかったが、

カードがNOと行っているのか、YESと言っているのかは、分かるような気がしていた。

けれど、こうして目の前に並んだカードを見てみると、真美は迷った。

カードに頼らず、自分の勘でアドバイスするにしても、初めてのケースにとまどっていた。

優樹菜にどうアドバイスしていいのか、全く分からなかった。

始まり（8）

結果がセトのカードなら、この問題を解決するのは困難に思われた。

しかし、5枚目のカードはロータスだった。

ロータスとは『はすの花』だ。しかも正位置だから、最後にはうまくいくことを示している。

別れたことが正解なのか？逆に、この2人の恋がうまくいくということか？

そして、どのようにアドバイスすれば、優樹菜の体調は良くなるのか？

ただ体調が悪いだけなら、真美はこう答えるつもりだった。

「もう1度、違う病院に行ってみることをお勧めします」と。

しかし、真美の口が勝手に余計なことを喋ったせいで、思いもよらない話の展開になった。

真美は誰かに助けを求めたくなった。

イチかバチか、真美は勘にまかせて話すことにした。

「あなたはお相手の女性に、酷い言葉で別れを告げませんでしたか？」

「どうして分かるの？私のこと、全部分かるの？」

優樹菜が動揺しているのが伝わってきた。

「あなたはそれでスッキリ別れたつもりかもしれない。でも、相手にしたら深く傷ついたと思いますよ」

優樹菜は目を伏せて、消え入りそうな声で言った。

「毎晩、無言電話がかかってくるんです。留守電にしているから、私は出ないけど」

「そうですか。毎晩となると、おつらいですね」

優樹菜の目から涙がツーと流れ落ちた。

「私、自分でも分かっていました。頭痛がするのは、無言電話のせいだって。

でも、そうは思いたくなかった。自分は正しいと思いたかった」

優樹菜の目からとめどなく涙があふれた。

「ひと言でいいから、これまでの感謝の気持ちと、

いたわりの気持ちを相手に伝えてみたらいかがですか？

そうすることによって、あなたの気持ちも晴れると思いますよ」

「いろんな意味で彼女には感謝しています。その気持ちを今夜、伝えようと思います」

真美が優樹菜を見ると、首筋のあたりから黒くもやもやしたものがスーッと消えていった。

どうなることかと思ったが、2人目の占いも何とか終わることが出来た。

泣いている優樹菜を見たオフ会のメンバーが、

「どうしたの？」「大丈夫？」「何か酷いこと言われたの？」と聞いている。

優樹菜は「何でもないの。大丈夫」とハンカチで目を押さえていた。

「あんたたち、そっとしてあげなさいよ。根掘り葉掘り聞いたりしちゃダメよ」

明美のひと声で、優樹菜は皆の質問攻めから開放された。

「さあ、私の番だ。いっちょ行ってくるわ」

真美は一息入れたかったが、トイレ休憩さえとれそうになかった。

明美は椅子に腰掛けると、真美に顔を近づけて「ねえ、さっきの子に何を言ったの？」と聞いた。

「さあ何を言ったと思いますか？」と真美が切り返すと、明美はそれ以上は詮索しなかった。

「さて、今日は何を占みましょうか？」

「美穂のことをお願いしたいの。あの子の仕事運はどうかしら？結婚運は？」

あ、占うのは1件だけだったわね。結婚は遠いと思うから、仕事運で」

500円で美穂の仕事運まで占うことになるとは、真美は予想もしていなかった。

「あの子ったら、会社を辞めたのはいいけど、次の就職先も探さないでブラブラして。

美穂にはどんな職業が向いているかしら？」

明美は大胆にカードを切った。

シャッフルしている途中でカードがバラけてテーブルに落ちた。

落ちたカードは上下を考えたりせず、そのまま元のカードに戻す。

たぶん何枚かのカードは逆位置になっているはずだ。

明美は勢いよくカードを3つの山に分けて、1つの山にそろえた。

真美が5枚のカードをめくってみると、意外にも繊細なカードが並んだ。

繊細というのは、真美がそう感じるだけで、実際は違うのかもしれないが。

5枚目の結果のカードはバステトだった。

バステトは猫の女神として知られている。

心の病を治してくれるカードでもある。

バステトは占いに用いるだけでなく、瞑想するときに使くと、

心の病の回復を助けてくれると言われている。

美穂と明美（2）

でも、エジプトカードが示す細かい意味は、真美にとってはそれほど重要ではなかった。なぜなら昔から真美は、占いを頼まれると、ほとんど勘で乗り切ってきたからだ。しかし、何も道具を使わずに占うより、目に見える物を使ったほうが受けが良かった。今回も、表面上はカードを使って占いをしているのだから、アドバイスに有効なカードが出た場合は、カードの意味合いを説明しながらアドバイスしたほうがいいと思っていた。

明美は美穂の仕事について占ってほしいと言ったが、考えてみれば余計なお世話だ。美穂の人生は美穂自身が決めることだ。それに、明美がとやかく言ったところで、美穂は聞く耳を持たないだろう。真美は美穂が初めてテンペストに来店した時のことを思い出していた。

「世界的なファッションデザイナーになろうと思っていたの私。
夢破れて、こうして真美のカフェでクリームソーダをすすってるけどね」

美穂はそう話していた。今でも美穂はファッション関係の仕事をしたいのかもしれない。「結果を申し上げる前に1つお伺いしますが、美穂さんは以前の会社ではどんなお仕事を？」
「事務職よ。あの子、そういう仕事に向かないのね。
コネがあったから入れたのに、紹介してくれた人の顔をつぶしちゃって」
「その会社に入る前は何を？」
「デザイナーよ。デザイナーと聞くといい感じでしょ？」
でも現実には、デザイナーとは名ばかりで、オーナーであるデザイナーの先生の雑用ばかり。でも美穂は頑張って、先生にも可愛がってもらったの。そしたら周りの子にねたまれて、ほとほと嫌になったみたい。そうだ、ちょっと待って。見せたいものがあるの」
明美は上着のポケットから携帯電話を取り出した。
「これ、うちの犬なんだけど、犬に着せている服は美穂が作ったのよ。器用でしょ？」
明美の写メには、ドレスのような服を着たチワワが写っていた。
「これも美穂が作ったのよ」
次の写真は、着物のような服を着たチワワがソファで寝そべっていた。
「美穂は手先が器用だから、それを生かした仕事が見つければねえ」
真美が占うまでもなく、明美は答えを見つけているようだった。

美穂と明美（3）

「このカードを見てください。バステトというカードです。
バステトは猫の女神として知られています。人を病気や悪霊から守護する女神です。
美穂さんの心の傷は癒されるでしょう。周囲の人がとやかく言わなくても、
自分で進むべき道を見つけて、新たな道を進んで行かれるでしょう。
ただ注意していただきたいのは、ご存知のとおり、猫というのは用心深い動物です。
あわてずに、何事も慎重に行動しなくてはなりません。
その点に注意すれば、美穂さんは直観に従って行動しても大丈夫です」
明美は口をポカンと開けて、真美を見ていた。

「あなたって、本物の占い師みたい。実を言うとね、それほど期待してなかったの。
私の命の恩人なのに、こんなふうに言ってごめんなさいね」
明美は穏やかに微笑んだ。

「あなたは靈感があるような、ないような、よく分からない人だと思ったけど、
こんなにしっかりと占いができるなら、500円は安すぎるわ。もっともらえば？」
そう言いながら、明美は財布から千円札を出した。

「細かいものがなくてごめんね。千円でおつりもらえる？」
真美がおつりを渡すと、明美は「ありがとさん」と言って席を立った。

3人の占いが終了して、明美のオフ会もお開きになった。
「ごちそうさま。お勘定お願いします」
「皆さんご一緒によろしいですか？」
「ええそれでいいわ。1人ずつだと面倒をかけるもの。その代わり、明細書を下さる？」
そう言われて真美はあせったが、友里が「はい、これっ」と明細書を渡してくれた。
真美が占いをしている間に、友里は明細書を用意していたのだ。
「あ、今日のこと、またブログに書くわ。良かったら見てね」
明美は真美と友里に名刺を渡した。

村田 明美

『カアちゃん喫茶店をめぐる』見てね！

『カアちゃんのわいわい雑貨店』買ってね！

アドレスは名刺の裏を見てね

「あら、雑貨店の社長さんですか？」
名刺を見てすぐに友里が聞いた。

「社長さんだなんて、いやだ恥ずかしい。そんな大したものじゃないわ。ネットオークションに出品しているだけ。

いただき物のタオルとか、使わなくなった財布とかね」

「儲かりますか？」

友里は興味深々だった。

「そんなに大した儲けはないけど、ちょっとした小遣い稼ぎにはなるわね」

「でも、梱包や発送が面倒でしょ？」

「それは妹がやってくれるから、私は楽なの」

「妹さんが？あぁ、この前一緒にご来店いただいた？」

妹は明美と違って物静かな人だった。

明美に強引に頼まれて断りきれず、梱包や発送をやらされているのかもしれない。

「私もネットオークション始めようかな？」

友里は目を輝かせている。

「売るコツはありますか？」

「そうねえ、皆が何を求めているかを見極めて、後は出品のタイミングと値段設定かしら？」

真美は2人の会話を聞いて、ふとひらめいた。

「あのう、美穂さんが作られた犬の服をネット販売されたことはありますか？」

「いいえ。あぁ、でもいいかもね。そうね、いいわ、きっと売れるわ。

私ったら、どうして思いつかなかったのかしら？

あなたってホントにすごい！さっそく美穂にも相談してみるわ」

明美は目を丸く見開いて、真美の腕をバシバシ叩いた。

「あらいやだ。美穂に注意されて気を付けていたのに、興奮して叩いちゃった。アッハッハ」

明美は豪快に笑った。真美もつられて笑った。友里はそんな真美を見て少し安心した。

オフ会のメンバーが帰り、店内は静かになった。

「真美、お疲れさま。お腹すいたでしょ？」

「ごはんより、トイレに行きたいわ」

「そんなの我慢したらダメよ」

「だって、トイレに行ってもいいですか？て言える雰囲気じゃなかったもの」

「確かにあの集団はちょっと怖かったよね。真美はよく頑張った。さあトイレトイレ！」

疲れているはずなのに、友里はご機嫌だった。

真美はクタクタだった。まだ閉店まで時間があるが、もう帰りたかった。